



Niigata Association of Nursing Care Research

# ニュースレター

第 8 号

## 第 7 回学術集会在開催されました！ テーマ：看護ケアに生かすキャリアデザイン

### 第 7 回学術集会を終えて

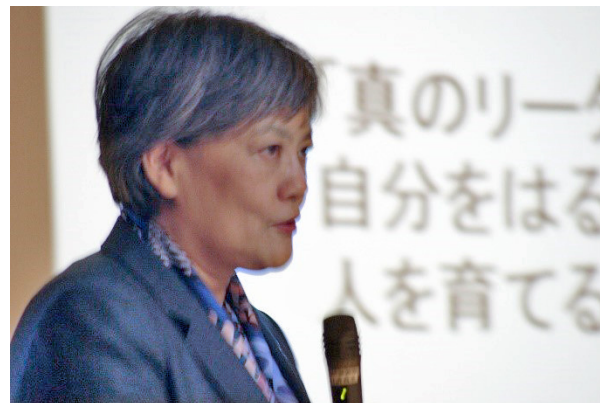
学術集会長 佐々木美奈子  
(新潟県立精神医療センター)

爽やかな秋晴れの下、平成 27 年 10 月 17 日（土）に第 7 回学術集会を開催することができました。新潟看護協会会長の佐藤たづ子様よりご臨席を賜り、当学会における今後の期待に対して思いのこもったご祝辞を頂戴しました。また、多くの皆様のご参加を頂き、盛会に終えることができましたことを心より感謝申し上げます。

今回のメインテーマは「看護ケアに生かすキャリアデザイン」で、これを踏まえて特別講演では講師として手島恵先生をお招きし、看護職としての仕事のあり方や生き方について見つめなおす貴重な機会となりました。また、シンポジウムでは、テーマ「生き生き働き続けるために 大切なこと」の視点からシンポジストの方々の多彩なキャリアに触れ、多くの示唆を頂きました。普段、目の前にある学業や業務に追われている参加者の皆様も、改めて自分のキャリアについて考え、様々なキャリアを重ね合わせながら、仕事の意味と将来の夢について自分に問いかけ、その限界を感じつつも、先を見据えて自分が目指しているキャリアデザインについて心を弾ませて思い描いていたのではないのでしょうか。

そして、一般演題では例年になく 26 題の応募がありました。口演が 7 題、示説が 19 題の研究報告では、各専門分野でご活躍の皆様の実践への探求心に感動し、看護の質向上に繋がって行くことの喜びを感じました。

この有意義な本学術集会にご尽力くださいました会員の皆様、準備委員ならびに協力委員や関係者の皆様に深く感謝いたします。



### 特別講演

「看護ケアに生かすキャリアデザイン」

講師：手島恵 先生

(千葉大学大学院看護学研究科教授)

座長 佐々木美奈子

(新潟県立精神医療センター)

講演の冒頭で、アニメの「アタックNo.1」や「巨人の星」が画面に現れ、昭和世代の参加者には、幼少期に心躍らせ『苦しくったってえ〜』『血の汗流せ涙を拭くな〜』と馴染んだ主題歌が瞬く間に甦る一方で、看護学生の参加者は、この主題歌について知る筈ありません。この世代間の隔たりが仕事に対する意味づけを転換させることを示唆する内容でした。

近年、女の子がなりたい仕事に看護師の順位が下がっている背景として、若者を引きつける努力が弱くなっていることを指摘されていました。時代の推移で仕事への価値観は、‘頑張る’から‘楽しむ’時代に、キャリアは‘梯子’ではなく‘ジャングルジム’に転換させることを提言されていました。回り道でも、看護という仕事に若者を引きつけ、その中に楽しみを感じ取ることができるポジティブなコミュニケーションの必要性を語られ、また「変えること」と「変えてはいけないこと」を踏まえ、自分を遥かに超える人を育てるといった私たちへの使命を教えてくださいました。

終盤に、看護者と患者の笑顔あふれる看護の根源的場面の DVD が流れ、会場は感動に包まれました。このテーマを推した故丹野かほるの会長も、この講演を喜んでおられると思いながら座長を終えました。



管理者になった現在も、日々やりがいを感じながら仕事に向き合っている。振り返ると、いくつかの転機があった。①役割モデルとなった Enterostomal Therapist との出会い、②質の高いストーマケアを子どもやその家族に提供したいという動機からの困難な目標への挑戦、③皮膚・排泄ケアを通じた成功体験と自己実現④キャリア開発に対する周囲からの支援、⑤医師・看護師との協働によるやりがいの相乗効果、⑥WOCN の後輩を育成するという新たな課題への挑戦、という 6 つの転機に、内発的な動機付けがあったのである。認定看護師とは、「特定の看護分野において、熟練した看護技術と知識を有することを認められた者」をいう。しかし、WOCN として専門性ばかり深めてきたのではなく、むしろ、専門性を高めるなかで視野が広がっていった。その結果、さまざまな機会に恵まれ、そうした機会に挑戦し成功を体験することで、やりがいをもって更なる看護へ臨む内発的な動機付けが促進された。もちろん成功するばかりでなく、失敗して落ち込むこともあったが、そのようなときには、周囲の強力な支援があった。私は自らの仕事を振り返り、生き生き働き続けられるために大切なことは、①自らがどうありたいのか立ち戻りながら、考え、行動に移し、進化し続けること、②その過程で、巡り合えた人との関係を大切に、巡り合えた機会に挑戦する勇気をもつこと、であると考えているのである。



**自分の人生をクリエイティブしよう！**  
**團原一恵（新潟大学医歯学総合病院）**

キャリアの積み方は人それぞれです。私のキャリアに影響を与えたものは、患者さんやその家族、同僚、上司、そして私の家族といった環境の全てです。キャリアを積むうえで自分が「やりたいこと」「やれること」「やるべきこと」が必ずしも一致するわけではありません。しかし、その 3 つができるだけ重なるよう努力することで、自分自身の仕事に価値を見出し続けていけると思います。また、スタンフォード大学

**シンポジウム**  
**「生き生き働き続けるために 大切なこと」**

**座長 加藤栄子**  
**（立川メディカルセンター立川総合病院）**

「生き生き働き続けるために 大切なこと」をテーマに、看護のエキスパートとして活躍されている 3 名からご報告をいただき、意見交換を行いました。山崎紀江さんは認定看護師の立場から、専門性を高めるなかで様々な転機を振り返り、その過程で巡り会えた人との関係を大切に、新たな挑戦への勇気をもつことについて報告いただきました。團原一恵さんは臨床看護師の立場から、女性のライフイベントや部署異動を経て、必要な資格取得等それぞれの節目で選択したことに対する自己満足感が働き続けることの根底にあることを語っていただきました。松山由美子さんは開業保健師の立場から、NPO 法人「はっぴい mama 応援団」設立までの活動を振り返り、同じ志を持つ仲間との協力体制や他機関との連携等について熱い思いを語っていただきました。共通点として、役割モデルとの出会いから自分の価値を高める姿勢をもち、やりがいを感じながらキャリアを重ねている姿でした。参加者の皆様も心が動いた看護の体験を思い出し、自分のキャリア形成について考える機会になったのではないかと思います。貴重な時間を共有できたことに感謝いたします。

**～シンポジスト～**  
**専門性を高めるなかで見出せたやりがい**  
**～認定看護師の立場から～**  
**山崎紀江（長野県立こども病院）**

私は看護師 3 年目まで、仕事の責任の重圧から逃げるために看護師を辞めることも考えていた。そんな私が皮膚・排泄ケア認定看護師（以下 WOCN）になり、



のジョン・D・克蘭ボルツ教授は、個人のキャリアの 8 割は予想しない偶発的なことによって決定されるが、その偶然を計画的に設計して自分のキャリアを良いものにしていこう、というポジティブな考え方を提唱しています。その予想しない出来事をただ待つだけでなく、自ら創り出せるように積極的に行動したり、周囲の出来事に神経を研ぎ澄ませたりして、偶然を意図的・計画的にステップアップの機会へと変えていこうとしているとき、いきいきとし、輝きを放っているのかも知れません。

出会いや経験は偶然かもしれませんが、それらを「どう意味づけるか」と「どうクリエイトするか」次第です。自分の人生を意味づけクリエイトするのは自分自身です。何かを選んできたという自己決定感、そしてそれにもとづく自己満足感と意味づけが「働き続けることの」根底にあり、「いきいき働くことの」下支えになっていると、実感しています。

これから看護を目指す皆さん、そして様々な経験を積まれてきた皆さんにとって、これからのいきいきと輝けるよう、今回の発表がお役に立てれば幸いです。

### 特定非営利活動法人 はっぴい mama 応援団 設立までの軌跡

松山由美子（開業保健師）

#### 【法人化までの経緯】

自身の子育てを通して、母親が安定して子育てをするためには、母親が心身両面で健康的に過ごすことが重要であると実感。母親のための場を作りたいと考え、一人の助産師との出会いをきっかけに開業。母親支援のための活動を始めた。地元新潟へ戻り、2009 年「はっぴい mama はうす」を開設。同じ志をもつ助産師・保育士・FP やアロマセラピスト等の専門家達によって任意団体「はっぴい mama 応援団」を結成。

母親の居場所や講座を開催。保健師・助産師を中心とした 15 名ほどのメンバーで活動を続け「産後ケア事業」も開始。地域における団体の役割を明確にし、事業の必要性・継続性を確信。2015 年 6 月 1 日 NPO 法人設立となった。

#### 【生き生きと働き続けるために大切なこと】

○自分自身を知る。

自分の感じ方や考え方、行動の仕方など、自分自身を知ることが、仲間や対象、関係者理解にも繋がる。

○明確な目標と揺るがない信念。

「ママの笑顔がいちばん！」をモットーに活動し、目指すところは当初より変わらない。

#### ○学び続ける姿勢

自身の学びを深めスキルアップを図ることが母子に寄り添うよりよい支援の提供に繋がる。

○同じ志を持つ仲間との意思疎通。

定期的にミーティングを開きメンバー間の意思疎通を図る。呑み会も欠かせない。

○個性を尊重し合える関係性

お互いの個性を理解し合い、率直な意見交換ができる関係作り。

○職種にこだわらず、それぞれの役割、分担を遂行する力。

職業・資格にこだわらず、それぞれができることを出来る範囲で協力し合い、認め合う関係性。

○他機関との良好な関係づくり

行政や医療機関とも連携することでケースの安心感にも繋がる。地域でのネットワークの構築。



### 口演発表

#### 口演発表の座長を終えて

座長 田中 美央（新潟大学医学部保健学科）

本年も 7 題の口演発表が行われ、新潟県内の各分野・医療機関における意欲的な実践を情報交換できる場となりました。この貴重なセッションを田宮病院の菅看護部長とご一緒に、楽しく温かな雰囲気の中で進行させていただきました。

看護師の認識に関する研究として、混合病棟での騒音、終末期患者のスピリチュアルペインへのかかわり、精神科病棟での暴力体験の振り返り、急性期病棟での代替療法導入について等の報告がありました。看護師と患者の認識の違いに気づくことの重要性が指摘され、それを実践に活かすことの困難さと具体的方法について、会場の皆様と情報共有することができました。さらに、チーム間の情報共有や学習機会を得ることの重要性など、活発に意見交流が行われました。また、NICU 退院後の育児支援外来の成果

と課題では、疾患や予後を踏まえた個別支援の重要性が話題となりました。キャリア発達の視点から、院内認定看護師教育課程や、社会人基礎力を活用した人材育成についてユニークな発表があり、スタッフ個々と組織のキャリアニーズや現状を相互に理解することの重要性が報告されました。

このセッションが、新潟県における看護の抱える多様な課題に応えることを痛感いたしました。また学生の皆さんはじめ参加された方々にとって、本口演が、知の交流と新たなキャリア再考の場となり、多様な分野の融合と協力により新潟発の看護を発進する場となることを予感させる会でもありました。

### ～口演発表を終えて～

#### 海老菜穂子（済生会新潟第二病院）

私は現在、皮膚・排泄ケア認定看護師として、褥瘡予防・管理や人工肛門造設患者に対してのストーマケア等について専従活動を行っています。今回、新潟看護ケア研究学会へ演題を提出したのは始めてです。抄録完成までを振り返ると、査読担当者の方と何度も通信をしていただきながら、ご助言・ご指導のもと修正を繰り返し、私にとってはこれまでにない厳しい作業過程となりました。皮膚・排泄ケア分野での学会発表の経験は何度かありましたが教育・管理系の発表経験はなく、この学会発表を通して、いろいろなことを学ばせていただきました。演題タイトルと内容の整合性があっているか、データの活用方法など、今まで自分ではできていたことが間違っていたと気づくことができました。

皮膚・排泄ケア認定看護師として、副看護師長として、『患者に適したケアの提供』『看護師教育・後輩育成』は私にとって、大切なキーワードです。今後は今回得た知識や手法等を活かしてポジティブに活動を行っていきたいと思います。

関係者の方々には深く感謝いたします。ありがとうございました。



## 示説発表

### 示説発表の進行を終えて

#### 座長 細道奈穂子

#### （新潟市医師会在宅医療推進センター）

今年度の示説は 19 題の演題があり、私は A 群の 10 題を担当させていただきました。過去 6 回の本学術集会と比べると演題数も多く、内容も様々な領域ゆえ、初めて座長を務める私としては不安な思いもありました。

堅苦しくせず、気軽に意見交換ができるような感じで進行すればよいのだと自分自身に言い聞かせ、準備をして当日に臨みました。

多少緊張はしたものの、進行するにつれて、発表者のいきいきしたプレゼンテーションと臨場感の伝わる研究内容に、探究心が刺激されるような気持ちになりました。

そして、質疑応答の時間は活発な意見交換となりました。時間が足らずに質問をお断りしてしまう場面もあり、申し訳なかったです。

時間の合図を見落としそうになるなど、慌ててしまったことありましたが、発表者や参加者の皆さんのおかげで無事終えることができました。ありがとうございました。

### ～示説発表を終えて～

#### 本間有佑子（JA 新潟県厚生連 佐渡総合病院）

今回、学会発表のお話をいただいた当初は、院内発表で使用した原稿やパワーポイントに少し修正を加えればよいのだろうと、深くは考えていませんでした。むしろ、論文をまとめることよりも島外で公式な学会に参加することへの緊張感の方が大きかったように思います。しかし実際は、A4 サイズ 4 枚の原稿を 1 枚にまとめる必要がありました。また、発表は示説で行うよう案内がありました。学会発表だけでなく、示説での発表も初めての経験であり、当初の予想をはるかに超えた大変さでした。しかし、この経験は自分たちの研究を振り返り、さらに考えを深めることのできるよい機会となりました。また、内容を簡潔にまとめ、わかりやすく伝えるということも学ぶことができました。興味のある発表には質問や情報交換ができ、今後の実践に活かしていける有意義な経験となりました。学会に参加させていただきありがとうございました。



参加者の声

第 7 回学術集会に参加して

井村紀代子 (医療法人青松会 松浜病院)

今回、当院も示説発表をするということで、新潟看護ケア研究学会の学術集会に初めて参加させて頂きました。どの発表も、興味深いものがありとても刺激になりました。また、ひとり通り発表、質疑応答が終わった後も、発表者の方に個別で質問されている様子を見て院内だけの発表で終わらせず、このような学会の場で多くの方に知って頂くことが看護の質の向上に繋がっていくのだと実感致しました。

午後からの特別講演とシンポジウムは「看護ケアに生かすキャリアデザイン」というテーマで手島先生をはじめ、シンポジストの方々からお話しをして頂き、自分自身の人生を振り返る良い機会となりました。そして、今後のキャリアデザインについて「これでいいのだろうか?」という迷いがありましたが、後押しして頂いたように思います。有意義な時間を過ごすことができ感謝致します。有り難うございました。

第 7 回学術集会に参加して

西山美希 (新潟病院附属看護学校 3 年)

この度、第 7 回学術集会に参加させて頂き、これから看護職として臨床に出るにあたっての心構えについて考えることができ、とても価値のある有意義な時間を過ごすことができました。

特別講演では、多様化する価値観や教育背景を持つ人が、看護のチームとして一緒に働くことは、一人一人の存在意義を認め合うことを意識することで労働環境や仕事に対する意欲向上につながるとう理解することができました。そのためには、お互いを理解する気持ちと、意識的にコミュニケーションをとることが大切であると感じました。また、お金をもらうためだけの仕事という捉え方ではなく、自ら学び自己啓発していくことで、生涯にわたる仕事になると学びました。

臨床に出た際は、今回の学びを活かし、人とのつながりを意識して行っていきたいと思いました。

看護研究セミナー

研修企画「看護研究セミナー」を終えて

企画担当 渡邊タミ子

今年度も事業計画の一環として『看護研究セミナー』を、第 1 回 (9 月 19 日)・第 2 回(10 月 10 日)・第 3 回(11 月 21 日)の日程で開催した。そのテーマは、「初心者のためのやさしく学ぶ 看護研究の進め方—よりよい看護ケアのために—」で、主な内容は下表に示したとおりである。この研修への参加者は、1 回目が 46 人、2 回目が 46 人、3 回目が 44 人の延べ 136 人で、病院看護師がほとんどであった。応募動機として、「今、看護研究を行っている」や「これから看護研究に取り組む予定」が多かった。受講後のアンケート結果は、全体的に概ね好評で、「文献検索の意味や方法が分ってよかった」「質の高い看護にするための研究の意義を改めて認識できた」「アンケート調査票の作成や面接法などが具体的にイメージついた」「倫理的配慮の重要性が分った」「研究発表までの道のりが理解できた」等の反応があった。一部、「研究課題に関する内容が難しかった」「時間がやや不足」等の回答があった。今後の課題として、資料内容の工夫や講義の進め方などの改善をより強化する必要性が示唆された。



平成27年度看護研究セミナーのプログラム

於：新潟大学医学部保健学科・E21講義室

項目	10:00-12:00	講師	13:00-15:00	講師
第1回	看護研究と研究課題	渡邊タミ子 新潟青陵大学看護学部看護学科	看護研究と文献	内山美枝子 新潟大学医学部保健学科
第2回	研究計画の基本	関井愛紀子 新潟大学医学部保健学科	主な調査方法	成田太一 新潟大学医学部保健学科
第3回	看護研究と倫理	渡邊岸子 新潟大学医学部保健学科	抄録作成方法 と発表方法	渡邊岸子 柏美智 新潟大学医学部保健学科

## 第 7 回学術集会（平成 27 年 10 月 17 日開催） アンケート結果

学術集会参加者は 247 人(前回 240 人)であった。回答数 157、回収率 64%であった。プログラム全体・特別講演・シンポジウム・演題発表について「とてもよい」「よい」の評価が多く、概ね良好な結果であった。

プログラム全体については「スムーズで良かった」「学術的な内容であり良かった」等と書かれていた。

特別講演については、「キャリアアップとはどういうことかや自分の看護に対する価値観を持ち向上するためには強みが大切であること等を学んだ」「管理職であるため、キャリア支援についての考え方を改めて再認識した」「自分の看護を振り返るよいきっかけになった」「ポジティブ思考の必要性に気づき、元気をもらった」等と、参加者の満足度が高かったといえる。

シンポジウムについては、「人生という大きなものについて悩んだり、考えたりしながら生きていくという強さを学んだ」「生き生きと活動されている内容から、看護の可能性を感じた」「ワークライフバランスが重要であり、生き生きと働き続けるためには、出会いや経験を大切にして意味づけを行うことがキーであると学んだ」と書かれていた。一方、進行については「シンポジストが働き続けることのできたエネルギー源や、看護を続けるものになったものに焦点を当てるとよかった」や、シンポジストが発表時間を守るような進行が必要であるという意見があった。

口演発表については、「全体的に発表論文のレベルが上がったと思う」「指導を受けて投稿できていることもあり、論文の質が良くなっている」「実践の場で意義ある研究ばかりで興味深かった」等と書かれていた。示説発表は、「内容がよく見やすかった」「工夫されたポスターが多い」という一方、「より工夫が必要な示説もあった」と書かれていた。

全体については、「内容がたいへん良いので、参加者が増えるとよい」「精神科領域の発表が多数あり、広く多くの人に伝える機会になっていた」「学生が多いので、看護職の割合が多くなるような働きかけが必要である」等と書かれていた。学生からは「自分も今後看護師として働く際にキャリアイメージを抱く機会になった」「看護研究をすることは日常の仕事をする上で、自らの看護観を見直し考えるきっかけになる」「生涯学び続けていく姿勢が大切であることを学んだ」等が書かれていた。他には「どんどん学会をアピールしてください」「来年の学術集会も期待している」等の意見も寄せられた。本学会は、臨床の実践報告と研究、臨床実践と教育活動、看護職と多職種とのコラボレーションを目指して学会運営を進めてきた。今後のあり方については、学会員と共に創りあげていきたいと考えており、皆様にご協力いただくことを期待している。

**第 8 回学術集会のご案内** 日時：平成 28 年 10 月 15 日（土） 会場：新潟大学医学部保健学科

テーマ：「看護とやすらぎ」

学術集会長 小山 千加代（新潟大学大学院保健学研究科）

特別講演：ナイチンゲールの自然観から修復と再生を支える看護へ

守屋 治代（東京女子医科大学看護学部教授）

教育講演Ⅰ：看護とやすらぎ——身体感覚としての心地よさ

柳 奈津子（群馬大学大学院保健学研究科講師）

教育講演Ⅱ：患者・家族全体に進化と成長をもたらすケアリングパートナーシップのケア

～M. ニューマンの健康の理論に導かれた対話による寄り添い～

三次 真理（武蔵野大学大学院看護学研究科看護学専攻准教授）

### 【一般演題募集】

学会 HP 上から抄録原稿の見本に従い、2,000 字以内の抄録（演題名、共同演者を含む演者名、各ご所属、キーワード 3 つ以内を冒頭に書く）を下記のメールアドレスに添付文書でお送りください。

E-mail：endai@nancr2016.org

演題応募締切：2016 年 6 月 30 日（木）

学会ホームページ <http://www.clg.niigata-u.ac.jp/~n-nursing-care/>

### 編集後記

今年度は、キャリアデザインをテーマに学術集会が開催され、集会当日は沢山の参加者で各会場が賑わい、活発な議論が繰り広げられました。「キャリアとは一生かけて自分の仕事を発展させていくこと」と特別講演にあったように、学会も年々キャリアを発展させていると実感できた一日でした。前丹野かほる会長が急逝されて 1 年、丹野先生が学会の発展を喜んでくださっている様子が思い浮かびました。【広報 N】

新潟看護ケア研究学会 事務局

〒951-8518 新潟市中央区旭町通 2-746

新潟大学医学部保健学科内 関井研究室

Fax：025 (227) 2637

Mail：a-sekii@clg.niigata-u.ac.jp

HP：http://www.clg.niigata-u.ac.jp/~n-nursing-care/